



高校までに育成する資質・能力の変化を受け、大学の入学者選抜(入試)も、「3つの資質・能力」、つまり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう人間性(主体性・多様性・協働性)」を評価するものへと変わってきています。加えて、どのような選抜方式においてもこれらを「総合的かつ多面的に」評価するようになっているのもポイントです。

「かつての入試は、筆記試験型(※用字解説参照)」
「一般選抜など」と総合評価型(総合型選抜・学校推薦型選抜など)に大別でき、前者は筆記試験の点数のみで判断し、後者は面接や

書類審査で評価するという人物重視の方式で、いわば両極端でした。それが近年は、筆記試験型でも学びのプロセスや主体性の部分を評価に加え、総合評価型でも筆記試験や高校の成績などで基礎学力を確認するようになっていきます。入試本番の筆記試験で点数が取れさえすれば合格できる、基礎学力が伴わなくても意欲があれば合格できるといったことは、起こりにくくなっているのです」

初実施の共通テストでは求められる力に変化あり

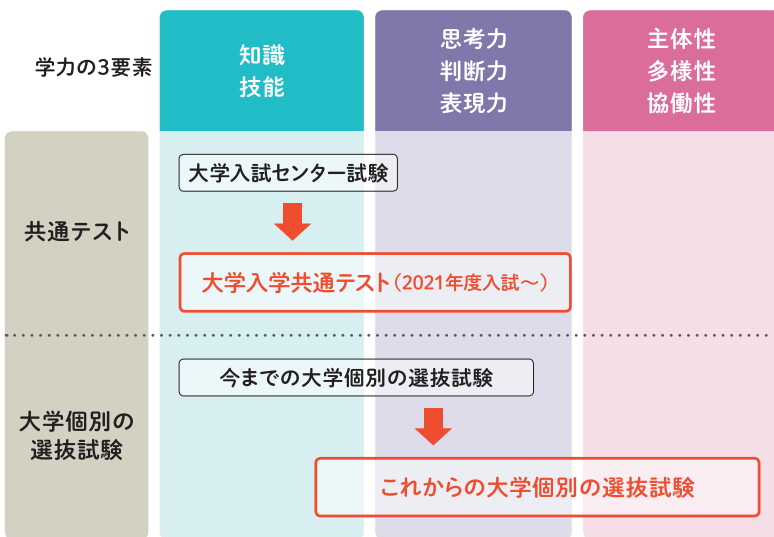
受験生の学力を評価する試験のひとつが、**大学入学共通テスト**(以下、共通テスト)です。今年、大学入試センター試験に代わって

初めて実施されました。国公立大学のみならず、私立大学でも共通テストを利用する入試方式が増えており、受験生の多くがこの試験を受けます。

「事前の告知どおりセンター試験からは問題の質が変化し、いわゆる知識問題は減り、知識を活用する力や論理的に深く考える力、全体を理解・整理して俯瞰するような力が求められる問題が多く見られました。とはいえ、共通テストは学力の3要素すべてを測れるものではありません」

倉部さんがそう述べるように、共通テストでは「主体性・多様性・協働性」まで測ることは難しく、そこは大学個別の選抜試験の領域になります(図1)。

図1 入学者選抜における「学力の3要素」の評価ポイントの変化



※黄色くマーキングした用語については、次ページに解説があります。

Change 3



入試・進路選択 はどうなる?

入試の変化は、大学からのメッセージ。 大学選びは「マッチング」の時代へ。

社会が変化し、教育や学力観が変わりつつある今、大学入試も大きな転換期を迎えています。親子で納得のいく進路選択をするために大切なのが、目先の形式の変化に振り回されないこと。何がどう変わるのか、わが子の自立支援のために保護者ができることは何か、専門家にお聞きしました。

進路づくりの講師・
高大共創コーディネーター
倉部史記氏



日本大学理工学部建築学科卒業、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。企業広報のプロデューサー、私立大学専任職員、予備校の総合研究所主任研究員および大学連携プロデューサーなどを経て、現職。

「マッチング」の手がかりは、大学の「3つのポリシー」にある

各大学は、自分たちが育てたい人材像、その育成のためのカリキュラム、入学者に求める資質・能力や特性を「3つのポリシー」として明示しており、入学者選抜もそれに従って設計しています。

大学選びの「ものさし」を、わが子仕様の「ものさし」に

大学入試が変わるなか、進路

選択に対する考え方も変えていく必要があります。高校生の子をもつ保護者がまずすべきことは、「大学選びの基準を改めて考えること」だと倉部さんは訴えます。

「コロナ禍により社会が短期間で激変したように、これからは変化がより激しい時代になります。自分たちの頃はこうだったから：は通用しない時代なんです。進路選択においても、より偏差値が高い大学、無名な大学よりもみんなが知っている有名大学が良いというの、もはや古いものさしです。一般的に、良い大学」とされている大学が、わが子にとって、良い大学であるとは限りません。大事なのは、マッチングの意識。偏差値や知名度といった世間の評価だけではなく、本人が望む学びが得られるかという視点を最優先していただきたいと思えます」

冒頭で述べたように、近年の入学者選抜は「総合的かつ多面的に評価」する傾向が強まっています。下に挙げた立命館大学や産業能率大学の例のように、共通テストの成績で基礎学力を測りつつ、自校が入学者に求める資質・能力や特性を測るための個別試験を実施するというケースが、選抜方式を問わず増えています。また、早稲田大学のように、高校3年間の経験や学びの履歴(ポートフォリオ)などの提出を求める動きも出てきており、「結果だけでなくプロセスも含めて総合的・多面的に評価する」という流れは、今後も加速するだろう」と倉部さんは言います。

マッチングがより重要になってい

総合的・多面的に評価する入学者選抜方式の例

早稲田大学

高校時代の経験についての記述が、全学部で一般選抜出願時の要件に

2021年度の一般選抜、大学入学共通テスト利用入試では、全学部においてWEB出願時に「高校時代に学校内外で取り組んだ、主体性・多様性・協働性に関する経験」を100~500字で記入することが要件に(ただし、合否判定には利用しない)。また、統計学や数理的アプローチが必要になる政治経済学部では、文系であっても共通テストの「数学I・A」を必須受験科目とするなど、大学が求める人物像や入学後の学びの実態に即した入試内容へと変わってきている。

産業能率大学

試験にスマホ持ち込み可能！知識・技能は共通テストで確認

試験にスマートフォンやタブレット端末、ノートパソコン、電子辞書などの持ち込みが可能(※)ということで注目を集めたのが、一般選抜「未来構想方式」。この方式では、共通テストの指定科目(3教科)で得点率50%を超える受験生のみが、大学が行う個別試験を受けられる。個別試験は出願期間中に提出する「事前記述課題」(400~600字程度)と試験日に課される「未来構想レポート」(A4レポート用紙2枚程度)からなり、合否判定には共通テストの成績は考慮されない。

立命館大学

共通テスト得点率65%超えが、合格の「必要条件」に

経営学部の一般選抜「経営学部で学ぶ感性+大学入学共通テスト方式」では、共通テストで一定の成績を取ることを合格の「必要条件」としている。可否自体は、学校独自の「経営学部で学ぶ感性」問題(発想力・構想力・文章表現力などを通じて「感性」を評価する問題)で判定するが、指定する共通テスト科目の合計点数が390点(得点率65%)以上でなければ、たとえ「経営学部で学ぶ感性」問題が高得点であっても合格することはできない。

東北大学

定員の3割弱を総合型選抜で募集。学力や人物を多角的に評価する

国立大学のなかでも早くから総合型選抜(旧・AO入試)に力を入れ、2021年度入試では定員の約28%をこの方式で募集。例えば、「AO入試Ⅲ期」の農学部の面接試験では、面接前に農業に関する小作文を課し、面接では出願資料と小作文を参考に、農学への関心度と知識、発想の柔軟性と豊かさ、表現力、行動力、協調性などを総合的に評価する。なお、「AO入試Ⅲ期」には共通テストも課され、高い水準の基礎学力が求められる。

る背景には、大学教育の多様化があります。近年は、各大学が特色ある教育を展開しており、同じような学部名、偏差値でも、教育の方針や内容はさまざまなのです。例えば、図2のように2つの大学の経営学部を比べてみると、それぞれゴール(育てたい人材像／DP)が異なるため、教育の内容(カリキュラム編成・実施方針／C

P)も求める学生像(入試の方針／AP)も異なります。そして、どちらが望ましいと思うかは、人それぞれなのです。「大事なのは、A大学とB大学の違いを知り、自分が望むものより近いものを選ぶこと。偏差値や学部名だけで選んでは、入学後にこんなはずじゃなかった、思っていたのと違うと、ミスマッチ

用語解説

②一般選抜

大学の入試方式のうち、特別選抜(総合型選抜・学校推薦型選抜・社会人・帰国子女などの各種選抜を除いたものを指す。国立大学では2月下旬に前期日程、3月初旬に後期日程の試験が行われ、一部の大学では中期日程もあり)各日程1校のみに出願できる。また、私立大学では主に1月下旬〜2月(一部の方式では3月にも実施)にかけて試験が行われる。

※機器の持ち込みは1台のみ可能。試験中にインターネットで情報を検索することが認められているが、通話やSNS、メールなどによる外部との連絡は禁止。



図2 同じ学部名でも「3つのポリシー」には大きな違いがあることも

	A大学 経営学部	B大学 経営学部
DP	●グローバルビジネスパーソンの育成	●難関資格の取得 ●就職率9割達成
CP	●企業と連携した実践的なプロジェクト型授業の展開 ●海外留学の必修化 ●専門科目の2割を英語で開講	●資格対策講座、公務員対策講座の充実 ●地元企業へのインターンシップ充実 ●ICT教育の充実
AP	●グローバル教育への意欲や関心をもっていること (その確認のための面接や小論文を入学選抜で義務化) ●外部英語試験の成績優秀者は一部試験免除	●バランスの良い基礎学力をもっていること ●指定校推薦枠の積極的活用

※DP、CP、APについては、ページ下の用語解説【3つのポリシー】を参照してください。

を起こしてしまいます。実際、大学の中退者や留年者の割合は、小さくありません。保護者世代にとっては「大学＝自由を謳歌する場所」という印象があるかもしれないですが、今はしっかりと学ぶ場へと変わってきています。サポートしていたら留年もしませんが、卒業もできません。多様な経験を積むことも大事ですが、大学生生活の

主軸はあくまでも学びなのです

学問、学校、自己について、3つの理解を深めていく

では、わが子が「自分にとって良い大学」を選ぶために、保護者はどのようなサポートができるのでしょうか。まず、マッチングの際の基準として、倉部さんは「学問理解・学校理解・自己理解」の「3つの理解」(図3)を挙げます。

「なぜその学問分野を学ぶのか、数あるなかでなぜその大学なのか、自分自身はどうなりたいたのか・なぜそれを学びたいのか」という問いに子ども自身が答えられるよう、できれば1年生の頃から対話をしながら理解を深めていけるといいでしょう。学校理解については、対照的な大学を対比するのがおすすめです。例えば、大規模校・小規模校、共学・女子大などの軸を設定し、比べてみるのです。データからわかることもあれば、学生やキャンパスの雰囲気など肌で感じることもあるので、多面的に見ることをお子さんに薦めましょう。い

ろんな大学を見ていくなかで見る目が磨かれますし、なんとなくこういう系統の大学に惹かれるな...という自分にとって重要な評価軸も見えてくるはずですよ

進路選択の主導権を握るのは子ども。意識的に子離れを

難しいのが、そこに保護者がどう関わるか。「ツッコミ役になってほしい」と、倉部さんは言います。

「お子さんが主導権を握り、進む道を自分で決めることが大事ですが、若いからこそ安易に決めがちなどころもあると思います。『〜に興味がある』『〜大学に行きたい』という発言には、『なぜ?』『〜のどこがいいと考えたの?』と問いかけてみてください。問いがあることで、お子さんの思考はより深まるはずですよ。『こういうデータや情報もあるみたいよ』と、リソースや別の切り口を提供するのも良いでしょう。保護者が意見を言い過ぎると、要望にならってしまうので注意が必要です。進路選択において、運転席でハンドルを握るの

世間の「良い大学」が、わが子の「良い大学」であるとは限らない

は、あくまでもお子さんです。保護者が望む方向に誘導するのはなく、そこは覚悟をもって子離れをしましょう」

報道にもあるように、コロナ禍は大学生に大きな影響を与えました。オンライン授業が増え、クラブ・サークル活動が自粛になり、友達にも会えず、バイトも思うようにできない...。思い描いていたキャンパスライフを送れず、孤独感に苛まれている人も少なくないでしょう。

一方、「大学で何を学びたいかが明確な学生は、コロナ禍でもモチベーションを維持できていると感じる」と、倉部さん。今、「何のために大学に行くのか」を改めて問い直すときが来ているのかもしれない。

図3 良きマッチングのための3つの理解

	レベル1	レベル2	レベル3
学問理解	数多くの学問に触れ、全体像を掴む	初歩の内容を体験してみる	専門の内容に挑戦する
学校理解	さまざまな大学があることを知る	教育内容を検証する	複数の大学を教育内容で比較する
自己理解	一番やりたい何かに挑戦してみる	これまでを振り返りさらに挑戦する	自分のモノサシを言語化する

【総合型選抜】
従来は「AO入試」と呼ばれた方式で、この方式による募集枠は年々増加している。エントリーシートや志望動機書などの書類審査に加え、面接、小論文、プレゼンテーションなどを課し、受験生の資質・能力や学習に対する意欲、適性などを時間をかけて総合的に評価する。2021年度入試からは、学校推薦型選抜、総合型選抜共に、学力を確認する評価方法の活用が必須となる。

【学校推薦型選抜】
いわゆる「推薦入試」。出願には在籍する高校の校長の推薦が必要で、高校の成績など出願条件が設定されている場合もある。国公立・私立を問わず多くの大学が実施し、近年は東大や京大などの難関国立大学でも導入されている。

【大学入学共通テスト】
2020年度入試まで実施されてきた大学入試センター試験の後継にあたる試験。初回となる今年は1月16日(土)・17日(日)に実施され(今年は特例で追加日程あり)、約53万人が受験した。記述式問題の導入は議論の末に見送られ、当面は全問マークシート方式の予定。6教科30科目のなかから志望大学が指定する教科・科目を選択して受験する。

【3つのポリシー】
各大学が教育理念に基づき策定・公表するもので、「ディプロマポリシー(DP)」「カリキュラムポリシー(CP)」「アドミッション・ポリシー(AP)」の3つからなる。DPは卒業認定・学位授与の方針であり、「学生が卒業後に身に付けるべき資質・能力」を示す。CPはカリキュラム編成・実施の方針であり、「教育の内容や方法・評価方法」を示す。APは入学を受け入れの方針で、「入学者にどのような学力を求めるか」や「具体的な入学選抜方法」を示す。まさに大学の本来を表したもので、自分に合った大学や学部を探す手がかりになる。